

天気の良い朝・ワンルームマンション・玄関

小物を置くような高さの靴箱・そこに飾ってある写真立て

その前を横切る男の影

靴を履く音

ロックを外す音がして玄関のドアが開き写真に外光が差し込む

ドアが閉まり男が遠ざかる足音

写真には可愛らしい女の人が笑っている姿

同日朝・閑静な住宅街

これから出勤という人たちがまばらに駅に向かって歩いている

人の流れとは逆の方へスマホを片手に何かを探しているような橋本雫（25）

歩きやすいようにカジュアルな装いながらも、よく見るとおろしたてのような服装をしている

雫「うーん。25年も経ったから街並みが変わったのかな。まあ、そもそもから違っているのかもしれないけど」

スマホを頼りに誰かの家を探している様子である

当たりをつけて曲がり角の方に向かって歩き出す

角に差し掛かった時、男（52）と危うくぶつかりそうになる

避けようとしてよろける雫

男「ごめん。大丈夫？」

雫「はい。あの、すみません」

男「いえ。こちらこそ。じゃあ」

男の顔を見て驚いたような表情になる雫

気づかずに歩き去る男

スマホを急いで操作する雫

一枚の画像を開いて手を止める

雫「見つけた」

同日朝・駅前の広場

通り過ぎる人に視線を送りながら、人待ちの様子の小鳥遊 雄二

腕時計にちらっと視線を走らせて

小鳥遊「やっぱり、ちょっと早すぎたかな」

おずおずと小鳥遊に近づいていく雫

雫「あの〜」

小鳥遊「はい。えっと。ああ、先ほどの」

雫「えっと、あの。わたし・・・」

誰だかわかりませんかといったような様子の雫

小鳥遊「あ・・・ああ（何かを納得したよう）」

ぐっと身を乗り出す雫

小鳥遊「もしかして。太田様ですか？」

雫「はい？（少し困惑している）」

小鳥遊「えっと。本日私をレンタル頂いている」

少しの間考えを巡らせている雫

雫「あ、はい。そう、それ。私です」

小鳥遊「ああ、やつぱり。自分も待ち合わせには早めにつくタイプですが、太田様もずいぶん早い方なんですネ」

雫「この辺あまり来たことないので、街並みを見ておこうかなと思って」

小鳥遊「なるほど。それで、先ほどはあんな場所で」

雫「あ、先ほどはすみません」

小鳥遊「いえ。とんでもない。（内ポケットから取り出しながら）名乗るのが遅くなってし

まいましたが、小鳥遊と申します」

両手でビジネスカードを渡す小鳥遊

雫「（両手で受け取りながら）」頂戴いたします」

カードに書かれた『高梨』という氏名を見て驚く雫

雫「あ……『たかなし』って、コトリアソビじゃないんですか？」

小鳥遊「えっ……前にお会いしたことありましたっけ」

雫「あ、いえ。その、会うのは初めてです」

小鳥遊「そうですか。ちょっとびっくりしました。そっちの高梨はビジネス用の名前なんです。実は本職は某会社のサラリーマンで、こっちは友達に頼まれて、時々手伝っているバイトなんですよ」

雫「ああ、そうだったんですね」

小鳥遊「まあ、会社にばれないように、気持ち程度の偽名なんですけどね。でも何故僕がコトリアソビだと？」

少しあせってごまかすように雫

雫「ええ、まあ、周りのタカナシはみなコトリアソビなので、それで珍しいなと思って
つい」

小鳥遊「そうでしたか。どちらかというところ珍しい方の名前だと思っただけですが……ああ、そ
うだ。それで本日は引越しの準備のお手伝いということでしょうか」

雫「えっと、引越し、引越し……あ、それなんですけど。今からでも変更
できますか」

小鳥遊「はい、まあ。変更の内容にもよりますが、大抵のことなら大丈夫です」

雫「では、今日一日私とデートしてください」

同日昼前・公園

穏やかな日差しの中、広い公園のあちこちで小さな子を連れた家族が遊んでいる
ベンチに座って周りの家族をほほえましく見つめている雫

缶コーヒーを買ってきた小鳥遊がひとつを雫に渡して隣に座る

小鳥遊「コーヒーでよかったですか？」

雫「はい、ありがとうございます」

小鳥遊「でも、デートって、こんなところでいいんですか？ てっきり映画とか食事とか、そ
んなのを想像したんですけど……」

雫「そりゃ私だって食事とか遊園地とか行きたいですけど……私がお金を払うのは何
か違うっていうか……」

小鳥遊「こちら仕事なので、デート代を払うってのはちょっと」

雫「それに、今日はこんな感じのデートがいいんです」

小鳥遊「でも、わざわざこんなおじさんを相手にしなくても……。太田さんは好きな人とかいないんですか？」

雫「居ますよ。彼氏」

急に慌てた様子の小鳥遊

小鳥遊「え。だったらこんなことしてたらダメじゃないですか。もしその彼氏に見られてもしたら……」

雫「見えますか。浮気しているように」

瞬く間にトーンダウンする小鳥遊

小鳥遊「(椅子の背もたれに寄りかかって) ない……。ですね。どう見ても、親子」

何故かともうれしそうな雫 そのうれしさをごまかすようにコーヒーをすす

雫「まあ、そう見えなくはないかもしれないですね」

背もたれから身を起こして小鳥遊

小鳥遊「あ、でも、援助交際と思われるかも」

はっと何かに気づいたように、独りつぶやく小鳥遊

小鳥遊「いや待てよ、お金の受け渡しがあるってことは、これは援助交際なのか？でもお金を受け取るのは俺だよな……」

雫「たとえば見つかったとして、何かやましいこととかありますか？」

小鳥遊「いや。無い……。です。全く」

やっと落ち着きを取り戻したが、ふたたび身を乗り出して小鳥遊

小鳥遊「まさか、おじさん好きで、その彼氏も俺と同じようなおじさん……」

小鳥遊の言葉にかぶせるように

雫「違います」

小鳥遊「そ、そうですね」

雫「小鳥遊さんこそ、ご家族に勘違いされたりしないですか？」

ふっとさみしそうな表情になる小鳥遊

小鳥遊「居ないですよ、家族なんか」

興味があるのを気取られないようにしながら雫

雫「でも、年頃の娘さんとか居て、たまに買い物とか付き合ってくれる素敵なパパって

感じしますよ」

雫をじっと見る小鳥遊

小鳥遊「もし娘が生まれていたら、今頃は太田さんくらいの年頃になっていたのかもしれないですね」

雫「生まれていたら？・・・」

あまり話を続けたくないような少し苦悶の様子の小鳥遊

小鳥遊「うん。事故にあったんだよ。産まれてくる2か月ほど前に」

少し身を乗り出す雫

小鳥遊「仕事から帰る途中、急に雨が降ってきてね。妻から迎えに行くってメールが来たんだ。雨もそんなに強くないし、来なくていいって返信したのだけど、もう向かってるって返事が来てね。足元悪いし転びでもしたら大変と思って、こっちも雨に濡れながら急いで彼女のもとに向かったんだ・・・。途中で信号があつてね、信号の向こうに彼女が居て、僕に向かって手を振ってた」

雫「・・・」

小鳥遊「信号が青に変わって、お互い歩き出したんだ。そこに信号を無視した車がすごいスピードで突っ込んできて」

雫「・・・」

小鳥遊 「車に気づいてすぐに駆けだしたんだけど、後一步間に合わなかった。(苦しそうな小鳥遊)ほんとにあと、あと一秒あれば彼女を突き飛ばして、僕が身代わりになれたのに」

深刻なまなざしでじっと小鳥遊を見ている雫

雫「お・・・」

首だけ雫の方を向いて

小鳥遊 「はは。初デートでする話じゃないよね。こんな話」

緊張した雰囲気をはらげるように雫

雫 「それで、その・・・お母さんは。あ、その子の母親って意味ですけど」

首を横に振る小鳥遊

雫 「そのあとは？再婚とかしなかったのですか」

小鳥遊 「大事な人も守れなかったのに、また家庭を持つとか考えられなかったな」

ちょっと身を乗り出すように雫

雫 「でも・・・でも、お付き合いした人くらいはいますよね」

小鳥遊 「いや、いないけど。なんか興味ある？こんな話」

雫 「あ、いや、デート相手の人柄とか知れて、なんか、その・・・」

小鳥遊 「変わってるね、太田さんは」

ビシッと指摘するように雫

雫 「それ」

小鳥遊 「えっ？」

雫 「その太田さんという呼び方やめてください」

小鳥遊 「それじゃあ、どう呼べば」

雫 「そうですね。それじゃあ・・・(考えるように)雫って呼んでください」

小鳥遊 「えっ」

黒地に白文字のテロップ

「ねえ、雫にしようよ。この子の名前」

少し心ここにあらずな小鳥遊

雫「どうかしました？」

ハッとして小鳥遊

小鳥遊「あ、いや、一応お客様ですし」

雫「そのお客様が依頼してるの。ほら、呼んでみて」

小鳥遊「では・・・(少し改まって)雫さん」

雫「〴〵さん〴〵はなしで」

小鳥遊「し、雫」

雫「はい」

名前を呼ばれてうれしそうな雫

対照的に少し照れたような小鳥遊

小鳥遊「なんか照れくさいな。本当の彼氏でもないのに」

雫「えっ、そっち」

小鳥遊「ん？そっちって」

雫「いえ。何でもないです」

小鳥遊「僕、なんか変なこと言った」

雫「ちよっと鈍感かなって」

小鳥遊「鈍感って。え、どういうこと」

雫「何でもないです」

小鳥遊 「いや、鈍感って。なんか意味ありだよね」

雫 「何でもないです」

ゆっくりとフェードアウト

同日昼過ぎ・先ほどの公園内別の場所

自転車にまたがっている雫

市の荷台をがっちりと押さえている小鳥遊

雫 「見てます?」

小鳥遊 「見てるよ」

一泊の間

雫 「まだ見てます?」

小鳥遊 「見てるって」

二人同時にそっと斜め後ろの人物の様子をうかがう

少し離れたところに座っている男の人がじっと二人を睨みつけている

さっと正面に向き直る二人

雫 「うわー、めっちゃ見てるじゃないですか」

小鳥遊 「だから見てるって言うてるじゃないか」

雫 「正直、あんなに見られていると、こっちはやりづらいですけど」

小鳥遊 「そりゃ、あの人からすると心配だろうからね」

雫 「私ならこの程度の傷、どうってことありませんよ」

小鳥遊 「そのポケには乗ってあげるべきなのかな?心配なのはこの自転車の方だと思うけ

ど」

雫「ちよつとスポークが曲がったくらいですよね。男ならそんな小さなこといちいち気にするなって思いますけど」

小鳥遊「いやスポーク曲がっただけでも十分大事でしょ」

雫「貸してくれた以上、ちよつとやそつとでおろおろするなんてみっともないですよ」

ひとり呟くような小鳥遊

小鳥遊「遠目にはどう見ても奪い取ったように見えたけど」

雫「なんか言いました？」

小鳥遊「いや何も言っていない」

覚悟を決めるように一回大きく息を吐きだす雫

雫「じゃあ、もう一回行きますよ」

やれやれという感じの小鳥遊

小鳥遊「やっぱり、まだやるの」

雫「やるにきまつてるじゃないですか」

仕方ないという感じの小鳥遊

雫「いいですか。絶対離さないでくださいよ」

小鳥遊「大丈夫。ちゃんと掴んでる」

ゆっくりと漕ぎ出す雫

よろよろしながら少しだけ動き出す自転車

小鳥遊「あ、ほら、ちゃんとバランスとって」

ふらふらして危なっかしい自転車

雫「そ、そんなこと言っても、バランスって、どうやってとるんですか」

半ば叫ぶように言いながら転倒する雫

小鳥遊 「もうちょっとスピード出さないとバランスもとれないよね」

雫 「乗れもしないのに、スピード出すとか無理です」

小鳥遊 「いや動いていない自転車でバランスとるって、乗れる人でも難しいよ。というか無理」

雫 「遠心力とジャイロ効果だっというのは分ってるんですけど」

小鳥遊 「こういうのは頭じゃなくて体で覚えるの」

再び自転車にまたがりながら雫

雫 「わかってますよ。それくらい」

小鳥遊 「というか、また今度でいいんじゃない。もうこれで30回は超えたと思うけど」

雫 「今日しかないんです」

そういつて自転車を漕ぎ出す雫

キヤーキヤー言いながら、また盛大に自転車を転倒させる雫

小鳥遊 「なんで今日しかないの。というか、もうこっちが限界」

雫 「一緒に居れる時間は今しかないから。だから今日中にどうしても乗れるようになり
たいんです」

その言葉に少し驚いたように小鳥遊

小鳥遊 「えっ。一緒になって、俺と？ いやまた依頼してくれればいつでも付き合うけど」

あいまいな笑顔を浮かべながら雫

雫 「そんなことわからないじゃないですか。明日死んじゃうかもしれないですし」

小鳥遊 「それってなんかのフラグ？ 俺、もしかして死んじゃうの。そういうこと？」

小鳥遊に背を向けて

雫 「死にませんよ」

その声は何となくさみしそうである

小鳥遊「えー何。なんか気になる。その言い方」

雫「もー、いちいち真に受けなくてください。さあ、もう一回行きますよ」

小鳥遊「まあ、理由はともかくここまでやったんだから、確かに乗れるようにはなってもらわなくちゃね」

自転車を漕ぎ始める雫

小鳥遊「右、左、右、左。体重をペダルに交互に乗せる感じで。あとは何も考えず前だけ見て」

少しずつスピードが増してく自転車

雫「ちゃ、ちゃんとつかんでくれますよね。まだそこいますよね」

バランスが取れているのを確認して、ゆっくりと手を放す小鳥遊

雫「もしかして、乗れますか？今、私、乗れますか？」

雫が離れていくのを見送る小鳥遊

スマホの着信音

ポケットからスマホを取りだしてメールを確認する小鳥遊

怪訝な表情になる小鳥遊

遠くから雫の声

雫「見ましたか？私、乗れましたよ。見えましたよね？私、乗れましたよね」

スマホをポケットにしまう小鳥遊

雫の方に向かって歩き出す

同日夜刻・程よい広さの道路

腕を組んで歩いている小鳥遊と雫

雫「なんか腕組んで歩いているっていうより、介護で支えてるって感じですね」

小鳥遊「それ誰のせい。何度ももう歳だから体動かないって言ったのに。あんなに走らされ
たから」

雫「私、すぐに転倒してたから、ほとんど動いてないはずですけど」

小鳥遊「大人の運動不足をなめるな」

雫「それ、ドヤ顔で言います？」

笑う二人

小鳥遊「そういえば、雫は普段は何してるの？さっきジャイロ効果なんてすっと出てきてた
けど」

雫「あー、私、教授なんです。大学で量子論とか教えています」

小鳥遊「えっ。女の人にこういうこと聞くのは問題かもしれないけど、今いくつだっけ」

雫「25ですよ」

小鳥遊「25って、そんな若さで教授になれるの。これから実績を積み上げていくって年齢
でしょ」

雫「若いからって理由だけで、大したことないって決めつけないでください。アインシ
ユタインがノーベル賞クラスの論文を3つも書いたのは26歳の時ですよ」

小鳥遊「へー、そうなんだ」

雫「まあ、アインシュタインほど天才ではないですけど、私もそれなりにはすごいんで
すよ」

小鳥遊「勝手に女子大生か新人〇」さんかと思ってた。例えばどういう研究をしているの」
雫「そうですね・・・多次元世界におけるラグランジュ均衡とか」

小鳥遊「なんかアニメに出てきそうな単語ばかりだね」

雫「もしかしてバカにしています？」

小鳥遊「してない、してない。でも、どうしてそんな研究をしようと思ったの」

雫「うーん、なんでだろう。小さいころ観た映画の影響ですかね」

小鳥遊「映画？」

雫「はい、インターステラーっていう映画です。知っています？」

小鳥遊「タイトルだけは。確かお父さんが小さい子供を残して宇宙に行っちゃうやつだよね」

雫「それ、すごいおおざっぱ過ぎませんか？まあ、あつてはいますけど」

小鳥遊「ふーん。すごいね。人の人生を決めちゃうような映画って。何がそんなに良かったんだろう」

雫「時間も空間も超えて、お父さんが傍に居てくれたってところです」

小鳥遊「うん、言ってることが一ミリもわからない」

雫「えーっと（財布からレシートを取り出して）・・・例えば一枚の紙があつて、こっちからこっちに進んだとします。二次元だとこっちの端とこっちの端が交わることはないですけど、 ∞ 次元にいる誰かがこんな風に端っこと端っこをくっつけたとしたら」

小鳥遊「ああ、なるほど。離れてるはずの点と点が交わることになるね」

雫「そうです。だから時間も空間も離れたところにいるお父さんがずっと側に居てくれたつてのは、何ら不思議でもなんでもないんです」

小鳥遊「じゃあ、『君も時空を超えてこの世界に来たの？』つて尋ねたとしても、全く不自然じゃないんだね」

驚いたように振り向く雫　しかしその表情は穏やかである